

介護福祉学科学生の生活体験実態の調査報告

Report of investigation of actual condition of life experience with
student who learning nursing welfare

中村由佳
Yuka NAKAMURA

丸山順子
Junko MARUYAMA

高野晃伸
Akinobu TAKANO

百瀬ちどり
Chidori MOMOSE

1. はじめに

介護保険制度が施行され、数回の見直しがなされる中で、公的介護のあり方についても論議されてきた。なかでも、公的介護サービスの提供者である介護福祉士については期待が大きい。介護福祉士は、少子・高齢社会を担う介護の専門職として制度化され、まもなく20年になるうとしている。この間、介護福祉士を取り巻く環境は介護保険制度を含め、大きく変化してきている。社会の介護サービスのニーズに応じて、介護福祉士養成の教育の見直しもされてきた。介護が必要となっても、豊かな生活を送るための介護サービスの提供者には、優れた援助技術と豊かな感性が求められている。しかし、一方では、介護福祉士を目指す学生たちの生活経験の乏しさも指摘されている。

少子化と便利さの中で育ってきた学生たちは、生活場面でのさまざまな体験が少なくなってきたことも事実である。内閣府の調査によれば、兄弟は平均2人であり、小学生から個室を与えられ、学習時間と学習環境を確保されてきているが生活体験は減少している。そのため、生活体験を取り入れるための総合的学習まで導入されている。

自分自身の生活経験が少ない学生たちが、高齢者や障害のある人たちの生活事象を理解し、生活の質の保証のための実践力を身につけることは容易いことではない。同時に、限られた時間の中で現場の実践力につながるような講義を、基礎教育には求められている。特に、生活援助技術の中心である介護技術は、生活体験と大きな関係がある。

そこで、今回、生活経験の少ないといわれる学生たちの入学前の生活はどのようなものであるのか、実態を把握し、学生たちの生活現実に立脚した技術教育を考える資料にするため、調査を行った。その結果、若干の示唆を得たので報告する。

2. 対象および調査方法

1) 調査対象：対象者は平成17年度入学生、男子23名、女子80名、合計103名である。

2) 調査方法：質問紙法により行った。質問紙は無記名の選択式とした。(資料1参照)

質問内容は、家族構成、母親の就業の有無、居住環境と家事に関する生活体験と過去の暮らしにおける生活用具の知識について問うものである。

調査時期は、初回の介護技術の講義のときに目的を説明し、講義に役立てるものであること、処理は統計的に行うことを告げ行った。初回の授業であり、回答率、有効回答率ともに100%であった。

3. 結果及び分析

1) 家族構成について

祖父母と同居しているという、いわゆる3世代同居が103名中59名、57%だった。兄妹については97名がいると答え一人っ子は6名、全体の6%だった。全国的に3世代同居が減少している中で57%の同居率は介護福祉を志望する学生の生活背景の大きな特徴とも言える。(表-1)

表-1 家族構成

	男子	女子	計
3世代同居	14	45	59
核家族	9	35	44
計	23	80	103

母親の就業状況は、専業主婦として家にいる状況は少なく、ほとんどが専業あるいはパートなどで仕事を持っており、家事と仕事を両立させている。

母子家庭、父子家庭などもある。

2) 住居環境について

住居環境では、家族の持ち家に暮らしている者が86名、アパート、マンションなどの集合住宅に暮らしているものが17名であった(表-2)。自分の部屋、もしくは普段よく使う部屋については洋室が69名、67%に対して、和室は37名である(表-3)。和室であるが、絨毯を敷いて使っているという回答もあった。そのため、普段使っている寝具については、ベッドという回答が73名、70%である(表-4)。和室を使っているも、ベッドに寝起きしているものが多いという状況である。自分専用の個室ではなく、兄妹と共有しているという者もいる。

表-2 生活環境

	男子	女子	計
一戸建て	18	68	86
アパート等	5	12	17
計	23	80	103

表-3 居室環境

	男子	女子	計
和室	10	24	34
洋室	13	56	69
計	23	80	103

表-4 寝具

	男子	女子	計
布団	9	21	30
ベッド	14	59	73
計	23	80	103

3) 生活経験について

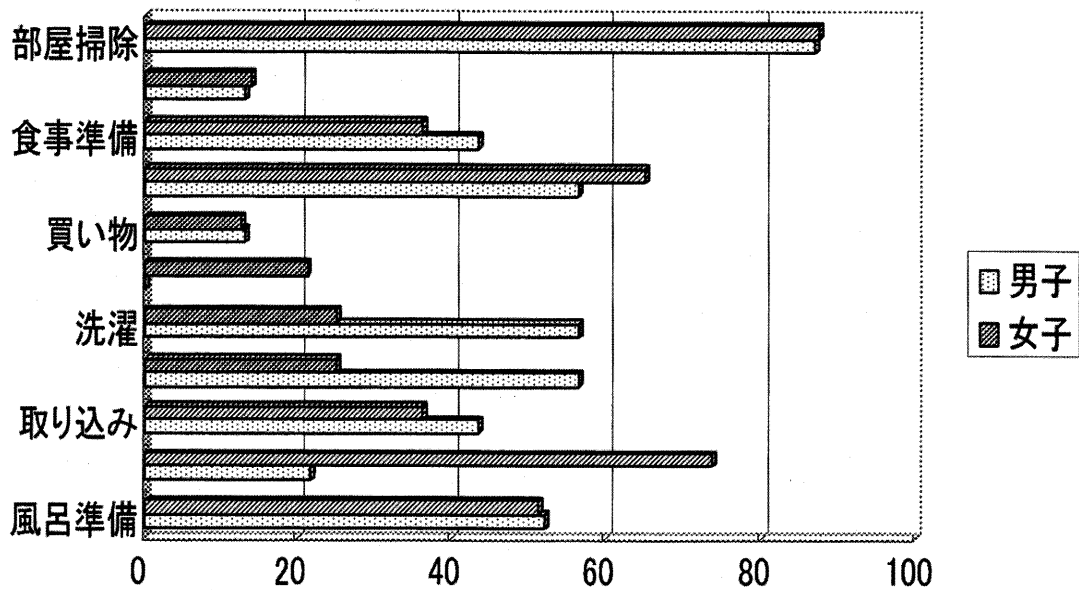
食事の準備、片付け、掃除や洗濯といった家事全般についてどの程度の頻度や内容を行っているのかを聞いた。(表-5、図1参)

表-5 生活体験の状況

	自分で行う		
	男子	女子	計
部屋掃除	20	70	90
風呂掃除	3	11	14
食事準備	10	29	39
食事片付け	13	52	65
食材買い物	3	10	13
弁当づくり	0	17	17
洗濯	13	20	33
洗濯干し	13	20	33
取り込み	10	29	39
ボタン付け	5	59	64
風呂準備	12	41	53

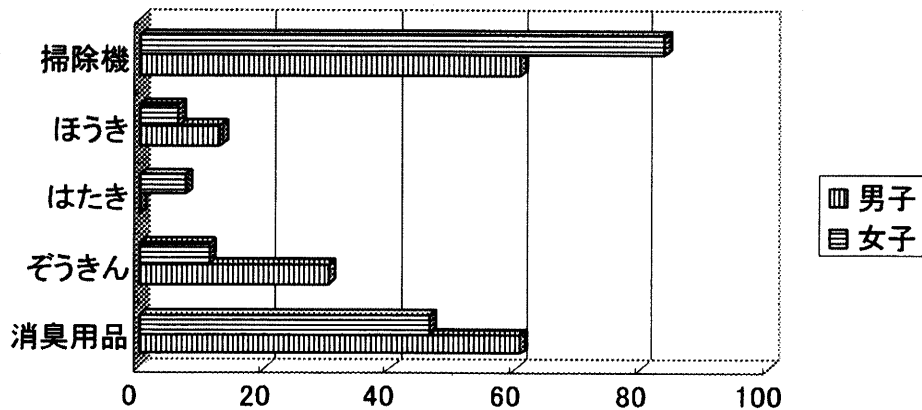
N=103

図1 生活体験の状況(男女比)



自分の部屋の掃除については、自分で行うものがほとんどであり男女の差はほとんど見られない。掃除の回数については、週に1回程度が最も多くみられた。掃除の方法については、掃除機の使用が最も多く、消臭剤の使用も多い。反面、箒や雑巾は頻度が少ない(図2)。

図2 日常用いる掃除用品



食事の片付けに対しては男女ともに半数が行っているのに対して、準備では男子が全体の43%が行っていたのに対し、女子では全体の36%が行っている状況である。これに対し、弁当作りについては男子では誰も行っていないが、女子は12%が自分で作っている。質問内容が、食事の準備としたために、捉え方にも差があり回答に統一性がなかったことも考えられる。しかし、食事の準備に関しては全体の38%が手伝っているのみで、6割の学生は家族が行うと応えており、多くの学生が食生活に関しては家族に依存している状況が伺える。

風呂掃除と風呂の準備については、掃除を行っている者はわずかだが準備については半数以上の学生が行っている。風呂に関しては、早く入る者が準備することも考えられるため、学生が準備するとも考えられる。また、湯を溜めるだけという給湯式の風呂が多いことから学生の役割になっていることも考えられる。

洗濯に関しては、自分ですると応えた者は男子で57%、女子で25%である。現在の洗濯は全自動洗濯機を使用すると考えられるため、自分で行う者も少なくない。男子で自分で行なう者が多いことの原因としては、毎日ではなく、休日にまとめて自分のものを洗っていることも考えられる。また、身の回りのことを行うことに慣れているから介護を志望してきたとも考えられる。

4) 日常生活用品

食事に関する器具としては、電子レンジの使用など電化製品の使用が多い。(図3)しかし、食事内容では手作りのものが多いという回答から(図4)、手作りのものを暖めるのにレンジを使うという生活が見える。また、電気ポットなどで常に湯が準備されていることで、カップラーメンなどの湯を使ったインスタント食品が食べやすい状況がある。

図3 よく使用する調理用品

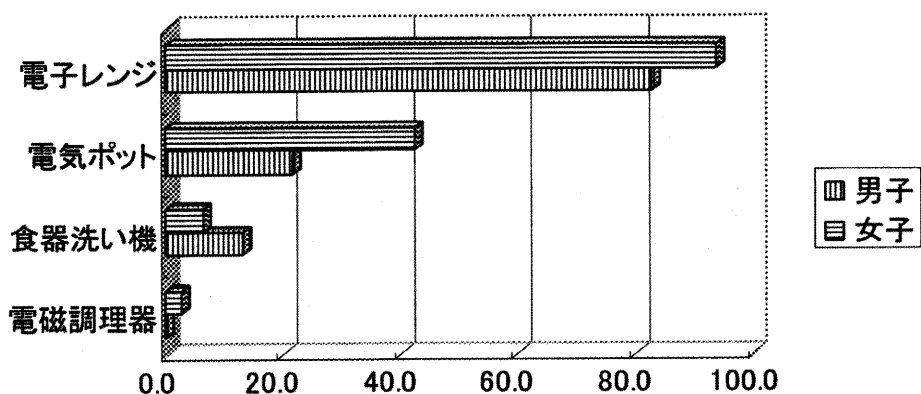
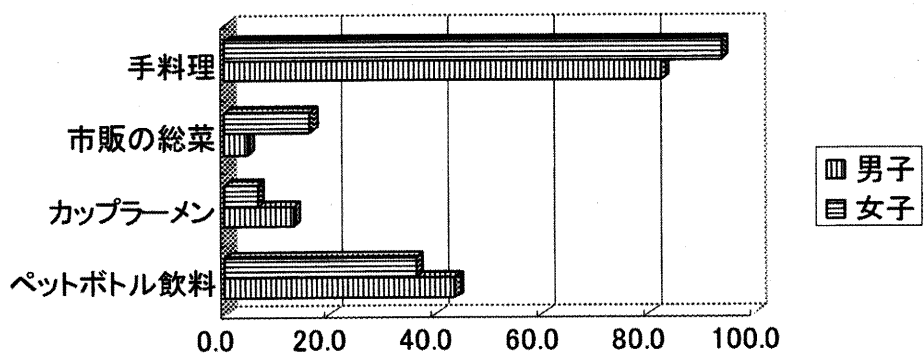


図4 日常の多い食事内容



ペットボトル飲料も、種類や容量など多様に市販されており安易に購入できるために日常食品の必需品となっている傾向がある。

生活面では、普段よく使う食器について箸が最も多いが、スプーンやフォークの使用も見られている(図5)。スプーンの使用が女子に多いのに対しフォークに使用は男子のほうが上回っている。食事の内容とも関係すると考えられるが、箸を使わない食生活をしている学生もいるということと思われる。また、生活行動面について起居様式は男子のあぐらを除き、畳や床に座ることよりもいすに座ることのほうが多くなっている(図6)。小沢らの調査でも地域差はあるがいす座が全国的にも6割を占めるようになっている。起居動作や住生活様式についての意識は明らかな地域性や発達段階および性差があると報告されており、学生たちの起居動作にも同様な傾向が見られる。

図5 よく使う食器

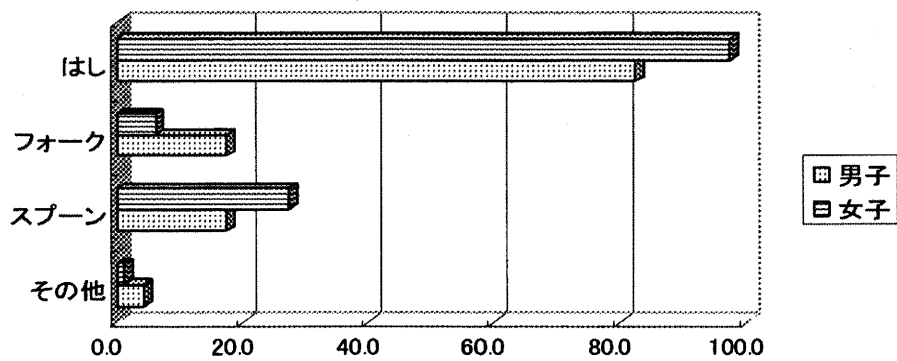


図6 生活行動

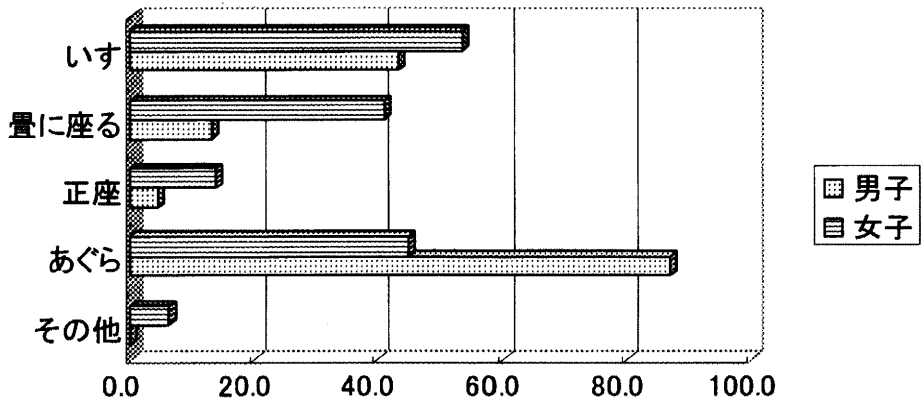
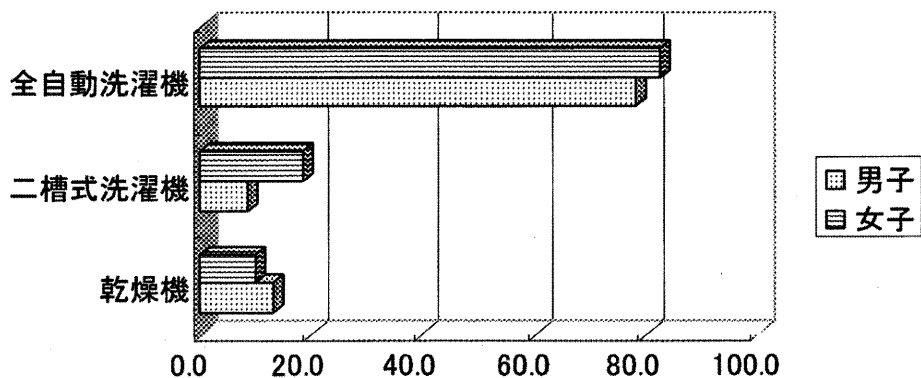


図7 洗濯の方法



洗濯を自分でしている学生たちの洗濯の方法は全自動洗濯機の使用が最も多い(図7)。

普段の移動手段でも、車の使用が多いことから家族や自分で車を使っての行動が当たり前の感覚になっているようである。

4. 考察

介護福祉士の養成課程の中で扱う介護の基礎技術は食事、排泄、入浴などの日常生活に関する技術と社会生活にかかわる技術、それらを組み立ててゆく技術がある。

臨地での介護福祉実習では、身体介護などに関わる技術の習得は常に目標としてあげられる。学生たちは実習の課題として、これらの身体介護の技術の習得を優先させる傾向が強く、関わり方や援助の姿勢に理解が及ばないことが多い。つまり、介護を利用者個々の、その人の生活の中での援助としてではなく、狭い意味での身体介護の技術ととらえてしまい、その人の生活という基本的視点を見落としてしまう側面が指摘される。しかし、生活者といいながら、生活についての明確な論議や結論がない。従って、生活を考えることは介護を考えることそのものでもあるといえる。

今回、学生たちの生活体験について実態を調査し、学生たちの生活意識の一端を把握することが出来た。それぞれの項目について考察する。

1) 家族構成について

介護福祉士を志向する学生たちは、高齢者と接する機会を持っているものが多い。3世代同居の学生が多いことも、介護福祉士養成校の学生の特徴と言える。生活体験が少なくとも、身近に高齢者の生活を見ていることでイメージ化はしやすくなる。また、入学後に高齢者の疑似体験を行うことで高齢者の行動がより理解できる。

構成家族が多いことや世代の違いは、それぞれのライフスタイルに触れる機会が多いことにもつながる。地域の行事や風習など小・中学生は比較的良好に知っているが年代が進むと触れる機会が少なく、大学生では地域の活動を「全く知らない」ものが20%いるという。理由としては「興味がない」ことが多い。しかし、身近に高齢者がいると近隣関係にも影響し、地域と関わる機会も増えてくる。高齢者を取り巻く人々とも触れ合う機会が出来ることは、さらに多様な人とのかかわりを持つことにつながり、新しい人間関係を形成するときにも積極的な行動が取れることにつながってゆくと思われる。それが臨地実習場所での積極的な利用者との関わり行動にもつながる。

介護は高齢者を中心として障害を持つ人など、多様な生活の側面を考慮し全人的なケアを提供していくことが求められる。日常生活への介入は、生活体験が多いことやさまざまな家族の生活状況に触れることによって、いろいろな状況にある人の生活がイメージでき、同時に、家族とのさまざまな経験の中からさまざまな感覚や感情を経験する。人が生活するうえでは、これらの、人が持つ感覚や感情を察することが出来ることが、より良い介護を提供することにつながっていくと考えられる。

2) 生活環境と日常生活について

住生活環境について考えると、地域性もあるがほとんどの学生が一戸建て住宅に暮らしている。個室所有については質問項目としてあげていないが、普段使う部屋としては洋室が多い。住居についての考え方も変化し、従来の日本家屋のような伝統を重視する考えから生活の場としての機能性を求める構造になってきている。

高齢者の生活スタイルも変化してきている。畳と布団での生活から、起居動作がし易い椅子

やベッドを使う生活に変化してきている。特に介護が必要となった人には、車いすやベッドの使用は介護する側にも負担の軽減となる。排泄に関しても、和式トイレより様式のトイレは使いやすいものである。しかし、椅子とベッドの生活以外の生活様式についても理解しておくことは、特に、認知症の高齢者の介護には必要である。認知症の人の生活を支援することの中に生活環境を整えることがある。

現在の日本の高齢者、特に介護を必要とする後期高齢者の生活してきた時代は、日本の伝統的な生活様式の中での生活である。そのことを理解し、環境作りしていくことが必要である。居住空間は、自分の存在を主張する場であると小俣らは述べている。現在、高齢者の入居施設も個室化が進んでいる。より自宅に近い雰囲気と、その人らしい馴染みの生活空間となるように工夫がされている。自分の空間を確保するには、自分自身に深く関わった物を使うことが効果的であるとされている。「私の場所であること」を表すためには、印となるものを使うことでその人の個性と存在を主張する。そして、自分の縄張りである専用個室は、濫りに他の人の干渉を避けたい所でもある。

食事や掃除、洗濯といった身の回りの生活についてはほとんどが家族任せの実態であるが、自室の掃除に関してだけは、男女ともに8割の学生が自分で行っていた。個室の使用率については、小沢らの調査でも大学生の80%が所有し、掃除・整頓についても自分の部屋のみ行う傾向があり、特に男子にその傾向が強いと報告されているが、本学の学生たちもその傾向がある。

先に述べたように、専用個室の所有はプライベート空間として、また、個人の社交や交流の場として重要な位置を占めている。小俣らによれば、「好きなことをする」「一人になる」「友人をもてなす、遊ぶ」などで自分の部屋を使うことが多く、生活の中で社会的交流の場として重要な位置を占めている、と述べている。そのため、自分の部屋は、自分自身に関する情報の管理と家族といえども他者からの孤立を可能にする状態であり、簡単に足を踏み入れてほしくない場所であるといえる。従って、掃除や整頓などについても自分の情報管理のために自分で行う傾向になると、解釈できる。一方では、家族との共用の場については家族任せの実態である。自分自身のプライバシーの確保へのこだわりと公的な場への関心の薄さは生活行動の中からもうかがえる。

食事の準備と後片付け、風呂の掃除と準備の関係も同様な背景とも考えられる。つまり、自分に関与することには行動するが、家族全体に関することについては積極的な行動が見られない。

3) 生活用品について

日常よく使う生活用品については、電化製品が多い。これは、社会現象として当然であると思われる。掃除機、全自動洗濯機、電子レンジといったものが生活の主要な道具となっている。これらは、マニュアル通りに操作すれば、常に一定の結果になる。スイッチを押した後は、終了までその経過を気にすることもない。欲しいもの、必要なものはほとんどが購入することが出来る。いわゆる使い捨ての品物も多い。景品として出回る生活用品も多く、日常生活の中で簡単、便利な消耗品が溢れている。

現代の若者はものを大切にしないといわれる由縁であるが、日常生活と生活用品を見ると仕方がないことであるかもしれない。

3世代の中では、高齢者の「もったいない」という教えや、古くなったものの再利用などを目にするかもしれない。雑巾を使って掃除をする、という学生がわずかにいるのは、習慣として教えられてきているとも考えられる。家事の手伝いについては住居環境と密接な関係があり、どのような道具を使っているかについても家族背景との関連もある。どのような生活用品をよく使うかは、その家族の生活様式にもよる。また、家族や家の職業にも関係すると考えられる。

介護福祉士は、家事援助も業務内容に含まれることを考えると、多様な生活様式のひとの、日常生活のさまざまな場に適した道具を使えることが望ましい。電化製品を使わない時の掃除や調理の方法についても、知っておく必要はあるのではないだろうか。

介護は「生活の自立支援である」とよく言われるが、「自立した生活とは何か」を、自立した生活を営んだ経験のない学生たちが理解することは困難がある。しかし、学生たちも自分らしい生活をしたという要求を持っている。自分自身の生活を振り返り、社会の中で自分らしい生活を自立して送ることを、介護を通して学んでゆくといっている。

5. まとめ

介護福祉養成課程のカリキュラムが改定され、技術教育に対する時間が増えている。その背景は、生活体験の乏しい学生たちに現場で役立つ技術を身につけたため、という狙いがある。学生たちの生活体験は実際にはどのようなになっているのだろうか。今回、介護技術教育を効果的に教授するための資料とするため、新入生のそれまでの生活体験について予備的に実態を調査した。

学生たちの生活は、一戸建て住宅に3世代同居で暮らし、専用個室を持ち生活している。3世代同居率は、平均より高いが、個室の所有率や生活体験は全国平均と大差は見られず、一般的な大学生の生活体験である。

日常生活の中で家族であっても、自分以外の人の生活のために行動する機会の少ない学生たちの実態が理解できた。今後は、生活技術の少ない学生に効果的に生活援助技術を教授するために更に詳細な、生活体験の分析が必要であると考えられる。

学生たちの現状を理解し、より質の高い介護の提供者の育成を考えてゆきたい。

引用・参考文献

- 1) 小沢紀美子、寺門征男、渡辺彩子、野村緑子：青少年（小・中・項・大学生）の住意識に関する調査研究 日本建築学会学術講演概集1989（9）P1029-1030
- 2) 小俣謙二、天野寛、河野和明：住まいと心の健康——環境心理学から見た住まいの工夫——ブレーン出版 東京 1997, 4
- 3) 粥川早苗、原千穂：介護に関する学生の意識の変化——介護実習終了後のアンケート調査—— 介護福祉教育9（2）p77-88
- 4) 中島健一：生活の中の私たちの感情・感覚 おはよう21第15巻11号 p22-29
- 5) 中島洋：介護福祉職の専門化に関する一考察——介護福祉士養成の視点から—— 介護福祉学12（3） 2005. 10 P29-40
- 6) 野崎智恵子、布佐真理子、三浦まゆみ、千田睦美：1年の経過から見た看護大学生の社会的スキルと自己効力間、生活体験の関連 東北大学短期大学部紀要11（2）P237-243

